

か も だ しょう じ
加守田章二と
くり き たつ すけ
栗木達介展



加守田章二「彩陶壺」(1971)



加守田章二「曲線彫文 長方皿」(1970)

彗星の如く現われ、次々と現代陶芸に新分野を開拓して、僅か49歳の若さで天逝した鬼才・加守田章二と、京都市立芸大の後輩でもあり、同大で教授として後進の指導に尽力し、妥協を許さぬ理知的な造形作品でファンを魅了した栗木達介の二人の現代陶芸の傑作47点を一堂に展示いたします。



加守田章二「彩色扁壺」(1972)



加守田章二「1979 角扁壺」(1979)



栗木達介「黒釉銀緑彩文蓋器」(1978)



栗木達介「黄鱗文卷弁陶」(1991)

【アクセス】

- JR新潟駅万代口（北口）より徒歩3分
- 車で新潟西.I.Cより約20分、紫竹山.I.Cより約12分

お知らせ

お車でお越しのお客様は、下記の「敦井産業第一駐車場」をご利用下さい。★40分無料券を差し上げます。尚、満車の際はご容赦願います。

新潟 東映ホテル ● 第四銀行 駅前支店 ● ホテルリッチ ● 万代橋方向 ● 敦井産業 駐車場 [入口] ● 新潟中央 郵便局 ● 新潟 東映ホテル ● ラマダホテル 新潟 ● 入口 ● 敦井美術館 ● 北陸ビル ● 北越銀行 駅前支店 ● 第五マルカビル ● バスターミナル 万代口 ● 東大通 ● 三井生命ビル ● 帝石ビル ● マルタケビル ● 東横イン ● 新潟駅 新幹線ホーム 南口



栗木達介「しろとぎんの作品Ⅱ」(1974)



栗木達介「組帯壺“ヴィーナス”」(1996)

会期 平成28年 10月11日(火)~12月17日(土) (2016)

- 開館/午前10時~午後5時(入館は4時30分まで)
- 入館料/一般500円 大高生300円 中小生200円 団体割引・20名以上
- 休館日/日曜・祝日 土曜日は小・中学生無料

つる い 敦井美術館

〒950-0087 新潟市中央区東大通1丁目2-23北陸ビル(新潟駅より徒歩3分)
TEL: 025(247)3311 FAX: 025(247)3340
公益財団法人 敦井コレクション

現代陶芸のパイオニア 加守田章二と栗木達介展 出品目録

No.	作 者	作 品 名	制 作 年	寸法(高×横×縦cm) (又は高×径cm)	備 考 (名品図録)	
1	加守田章二	炆 器 面 筒	昭和44年	1969	29.0 × 20.0 × 14.5	P194
2	〃	曲 線 彫 文 長 方 皿	〃 45年	1970	12.0 × 85.5 × 30.0	P195
3	〃	彩 陶 壺	〃 46年	1971	26.5 × 23.5	P195
4	〃	壺 形 彩 陶	〃 46年	1971	17.7 × 16.5	
5	〃	彩 色 合	〃 46年	1971	9.5 × 10.2	
6	〃	彩 色 角 扁 筒	〃 47年	1972	35.5 × 16.0 × 11.0	
7	〃	彩 色 扁 壺	〃 47年	1972	25.5 × 30.5 × 9.4	
8	〃	1973 壺	〃 48年	1973	30.0 × 22.5 × 15.0	
9	〃	1973 壺	〃 48年	1973	25.6 × 17.0 × 12.0	
10	〃	1973 壺	〃 48年	1973	60.2 × 27.0 × 19.4	P195
11	〃	1973 壺	〃 48年	1973	37.0 × 21.0 × 15.0	
12	〃	壺 — 1973	〃 48年	1973	26.5 × 18.0 × 13.5	
13	〃	1974 壺	〃 49年	1974	74.0 × 23.5 × 21.0	P195
14	〃	1974 壺	〃 49年	1974	39.5 × 24.0 × 14.0	
15	〃	1975 彩 色 壺	〃 50年	1975	33.4 × 17.5 × 17.5	
16	〃	1975 彩 色 壺	〃 50年	1975	45.5 × 25.4 × 18.5	
17	〃	1976 壺 (青釉条文)	〃 51年	1976	47.0 × 20.0 × 12.4	
18	〃	1976 壺 (白磁条文)	〃 51年	1976	30.0 × 20.5	
19	〃	1976 壺	〃 51年	1976	31.0 × 13.0	
20	〃	1977 壺	〃 52年	1977	52.2 × 19.3 × 17.5	
21	〃	1977 壺	〃 52年	1977	46.8 × 19.8 × 11.4	
22	〃	1977 鉢 (矩 形 皿)	〃 52年	1977	5.4 × 50.0 × 39.0	
23	〃	1977 鉢 (輪 花 皿)	〃 52年	1977	6.5 × 36.5	
24	〃	1977 壺	〃 52年	1977	46.0 × 25.0 × 12.0	
25	〃	1978 壺	〃 53年	1978	43.5 × 19.0 × 13.5	
26	〃	1979 壺	〃 54年	1979	32.7 × 20.0 × 16.7	
27	〃	1979 角 壺	〃 54年	1979	32.0 × 13.0 × 13.0	
28	〃	1979 角 扁 壺	〃 54年	1979	24.5 × 16.4 × 9.5	
29	〃	1980 扁 壺	〃 55年	1980	36.0 × 22.3 × 15.0	
30	〃	1980 壺	〃 55年	1980	34.2 × 28.0 × 24.0	
1	栗木達介	き い ろ い 壺	昭和42年	1967	29.0 × 50.0 × 32.5	
2	〃	あ お い 作 品	〃 44年	1969	38.5 × 47.0 × 46.5	
3	〃	し ろ と ぎ ん の 作 品 II	〃 49年	1974	44.0 × 78.0 × 75.0	
4	〃	黒 釉 銀 緑 彩 文 蓋 器	〃 53年	1978	37.0 × 41.0 × 40.5	
5	〃	黒 釉 銀 彩 文 扁 壺	〃 55年	1980	25.0 × 22.0 × 18.0	
6	〃	這 う か た ち	〃 55年	1980	30.0 × 58.0 × 73.0	
7	〃	銀 緑 彩 花 器	〃 57年	1982	63.5 × 27.0 × 18.0	
8	〃	銀 紅 彩 地 文 陶 ま が り	〃 59年	1984	80.5 × 26.0	
9	〃	這 う か た ち “始源の呼び声” I	平成元年	1989	71.0 × 58.0 × 30.5	} 3点セット
10	〃	這 う か た ち “始源の呼び声” II	〃 元年	1989	61.0 × 41.0 × 38.5	
11	〃	這 う か た ち “始源の呼び声” III	〃 元年	1989	56.0 × 38.5 × 42.0	
12	〃	黄 鱗 文 変 壺 “卷 弁”	〃 3年	1991	30.0 × 25.0 × 27.0	
13	〃	黄 鱗 文 変 壺 “合 弁”	〃 3年	1991	28.0 × 26.5 × 26.5	
14	〃	黄 鱗 文 変 壺 “組 弁”	〃 3年	1991	29.0 × 30.0 × 29.0	
15	〃	黄 鱗 文 卷 弁 陶	〃 3年	1991	41.0 × 63.0 × 39.0	P189
16	〃	形 を 離 れ る 帯 模 様 I	〃 8年	1996	28.5 × 29.0 × 24.0	
17	〃	組 帯 壺 “ヴィーナズ”	〃 8年	1996	45.6 × 21.8 × 19.5	

かもだしょうじ
加守田章二 KAMODA Shoji
昭和8年(1933)4月16日～
昭和58年(1983)2月26日 没年49歳

大阪府岸和田市生まれ。京都市立美術大学(現・京都市立芸術大学)工芸科陶磁器専攻に学び、教授富本憲吉の薫陶を受け昭和31年卒業。同34年栃木県益子町で開窯し同36年日本伝統工芸展に初入選以来連年入選。同39年日本工芸会正会員、同41年日本陶磁協会賞受賞、同42年高村光太郎賞を受賞す。この年日本工芸会正会員、新匠会会員を辞して無所属となり、以後個展のみで作品を発表。翌43年岩手県遠野市に築窯、遠野を拠点に益子と行き来しながら制作に専念す。昭和44年3月ギャラリー「手での江崎一生・森陶岳との「3人展」を皮切りに、ギャラリー 手や南青山グリーンギャラリー、日本橋高島屋を会場に半年パターンで次々と独創的な作品を発表し、“現代陶芸の鬼才”として陶芸界に大きな影響を与え、熱狂的ファンを生んだ。昭和49年芸術選奨文部大臣新人賞を受賞、同54年東京・東久留米市に新しい陶房を築く。同55年春から体調を崩し、翌56年入院療養するも58年2月26日白血病のため逝去す。

くりき たつすけ
栗木達介 KURIKI Tatsusuke
昭和18年(1943)11月20日～
平成25年(2013)10月12日 没年69歳

愛知県瀬戸市生まれ。京都市立美術大学(現・京都市立芸術大学)工芸科陶磁器専攻に学び、最晩年の富本憲吉教授の警咳にふれ昭和41年卒業、郷里瀬戸にて作陶活動を始める。翌42年日展初入選、同44年・46年に朝日陶芸展大賞を受賞、同52年にも3度目となる朝日陶芸展大賞を受賞す。同52年・59年日展特選、同53年日本陶磁協会賞、同54年愛知県芸術文化選奨を受賞。昭和58年母校の京都市立芸大の教員となり、制作拠点を京都に移す。同61年京都市立芸大助教授に、平成5年教授に就任、同6年4月から1年間英国のバース大学で作陶指導のため渡英す。同12年MOA岡田茂吉賞工芸大賞、同14年京都美術文化賞を受賞。平成19年3月作陶に専念するため京都市立芸大教授を退任し、その後名誉教授となる。国内外の展覧会への招待出品も多く、立体造形の装飾性に主眼を置いた完成度の高い作品を創作した。